



何処へ？
逃走する世代



小林 道憲

何処へ？逃走する世代

ブームはおおかたまやかしてある

ブームというものは、大概、突如として起き、そしていつのまにか消え去ってしまう空しいものである。ブームは、どこからともなく湧き起こってきて、しかも、知らないうちに、跡形もなくなってしまう。それは、勢いの隆盛なときは、誰も抗することのできないほどの力をもっているかのようにもみえる。しかし、これは一種の共同幻想によってつくられているにすぎないのだから、やはり、これとても、ちやうど海潮が引くように、いずれは雲散霧消してしまう。人々は、ブームのときには、気が狂ったようにそれに飛びつき、誰もがそれを口にし、知らない者はまるで愚か者でもあるかのようにみえすが、時が過ぎれば、当の騒いだ人々も、狐憑きがとれたように、あっけらかんとしているものである。事実は何も変わっていないというのに、ブームの方が先に衰えてしまう。

ブームというものは、いつも、何かしら胡散臭いものをもっており、しかも、概してそれは偽ものである。現代においては、流行するものは何ら不易なものを宿さず、逆に、不易なものが流行するということは、今日ほとんどありえないからである。だから、私は、ブームになった本とか、記事とか、その他どんな情報も、本気では読みもせず、見もせず、おおむね無視することになっている。それが、ひとつの明確な批判の意思表示でもあると思うからである。

未熟を権利とする青年達

いつの時代でも、特に近代になってからというもの、大人に理解してもらえない若者の考えというものを、まるで若者にのみ許される特権的思考でもあるかのように主張することによって、若者を代弁する青年が登場してきて、それが一世を風靡し、ブームを巻き起こすことはあった。

第二次大戦後のわが国だけをとっても、〈太陽族〉という流行語を作ってデビューした作家がいたし、『されどわれらが日々』という若者の挫折を売りものにした作品でもてはやされた作家もいた。その他、青春時代の革命運動での体験を商売道具にして、あろうことか、

商業ジャーナリズムに乗った評論家も登場してきた。近年の『限りなく透明に近いブルー』にしても、『なんとなくクリスタル』にしても、『構造と力』や『逃走論』にしても、『サラダ記念日』にしても、それぞれ主張内容は違うが、若者世代の意識の代弁という点では同類のものとみてよいであろう。彼らは、おのが世代の幼稚な経験に固執し、むしろ、この幼稚であることを売りものにしてきた。それどころか、現代では、殊にジャーナリズムの世界では、かえって、そういう未熟な青年達がおだてられ、甘やかされてきたのである。

確かに、近代の精神構造は、大人には理解できなくなった青春時代の感覚を、若者達が権利として振りかざし、それにむしろ大人達が迎合し、媚び諂らうというところにあつたと言えるであろう。青年は、青年であるというだけで、まるで特権階級でもあるかのようには振舞い、それに引き寄せられるようにして、皆がこぞって「若い」ということに価値をおき、年寄も中年も、どうにかして若々しくあろうと無理をしようとする。それほど、若さというものが尊ばれ、老練ということが蔑まれるのである。かつて、若さは未熟を意味し、若者は、まだこれから指導され、大人の世界に入るべく訓練さるべき人間を意味し、逆に、老年は、経験と知恵を身につけた熟達者として尊ばれたのだが、現代では、この世代の重心が逆転する。

だが、若者達がそのように遊びほうけてじやれていられるのは、ただ単に、何不自由なく与えられた上に、社会的義務が底なしに免除されているためにすぎないのではないか。現に、オルテガは、『大衆の反逆』の中で、こう言っている。

「あらゆる義務から逃避するという事実は、現代の世界でいわゆる『青春』謳歌の基礎となつている、なかば滑稽で、なかば破廉恥な現象を、いくぶんか説明してくれる。……人々は、喜劇的に、自分が『青年』であると宣言する。なぜかという、かれらは、青年は、熟年に達するまで無期限に義務の履行を遅らせることができるのだから、義務よりも権利をよけいにもつことになる、ということ聞いたからである。……」

まるで嘘のように見えるかもしれないが、青春はゆすりになつてしまった。……暴力のゆすり、冗談半分のゆすりである。そのどちらも同じことを望んでいるのだ。つまり、劣等な者、凡庸な人間が、いつさいの服従からの解放感を味わおうというのだ」と。

世代の分断と切那主義

近代という時代は、世代が世代を蹴落して限りなく逃走していく時代であつた。ここでは、各世代は、きれぎれに分断され、幾重もの層を作り、かくて、世代は世代をもちや理解す

ることができなくなり、互に反撥する。わが国でも、世代の分断はすでに久しく、例えば、明治世代と大正世代では、明らかに、考え方においても行動様式においても違いがある。大正世代と昭和世代も、戦争を境にして、戦中派と戦後派に分かれ、ここにももちろん大きなギャップがある。同じ昭和世代でも、旋跡閣市派・学童疎開派、さらに戦後っ子・戦無派に分かれ、同じ戦無派でも、団塊の世代と新人類では、意思疎通さえ不可能なくらいのもの感じ方の違いがある。へ世代論がもてはやされるのも、そのような、世代が次々と分断されていく近代の（逃走の構造）からくることである。

このような逃走の世界では、何かあるひとつの共通の経験を通して、人々が理解し合うということがないから、人々は、それぞれの世代の狭い体験に執着してバラバラになる。なかでも、逃走の推進者、つまり青年達は、以前の世代の価値観や世界観を粉々に破壊し、破壊することを自らの特権と自認して、すべてのもから逃走するから、彼らの精神もまた破壊され、中心を失い、散乱する。かくて、青年達の魂は一種の欠如態となり果てるから、そこでただ頼れるものは、切那切那の感覚だけだということにもなる。

フィーリング人間というものが登場してきたのも、おそらくそのためであろう。というより、それは、その最類落形態だと言わなければならない。だからまた、このような切那的な感覚のみがわずかに価値判断の基準になるようなところへは、どんな無関連なものでも、同時に入り込んでくることができる。矛盾したものでも、正反対のものでも、この精神構造の中では、同列に同席しうるのである。ここには、マンガ本が入り込んでくるかと思うと、また時には、高尚そうな哲学本も入り込むことができ、しかも、それらはすべて相対的な価値しかもたない。

マックス・ピカートは、『われわれ自身のなかのヒトラー』の中で、こう言っている。

「若い人たちの頭のなかには、文学、歴史、外国語、数学、物理、化学等々と、まるで異質な教材がめつたやたらに積みあげられる。……そして学生は、あらゆる教材はただ一つの世界の各部分であることを学びとることができない。……つまり万事が無関連で支離滅裂なのだ。……このようにして学生は、自己自身をも——雑多な諸部分をなしている教材に中心点がないのと同様に——どこにも中心点をもたない連関性なき断片としてしか把握できなくなる……。」

支離滅裂の精神構造

このようなところでは、哲学もまた単なるアクセサリーにすぎなくなる。すでに彼らは

いかなる創造性をも失っているから、すでにあるところの哲学らしきものを、フリーコーダのデリダだの、構造主義だの記号論だのと出し並べて、それをチャラチャラと身につけることになる。少なくとも、身につけたつもりになる。しかも、それは単なるアクセサリーにすぎないから、そのうちのひとつを本気で究明するということもなく、ちょうど気に入らなくなったアクセサリーを放つてしまうように、それらすべてを途中で投げ出してしまつて、逃走していく。まるで移り気な鳥のように、あるものからすぐにまた別のものへと飛び移つていく飽きっぽさ、それが、このへ逃走する世代の性格である。このようにして、関連なきものの同列化は起き、ひとつの階層的秩序が、青年達の魂の中で崩壊する。そのような構造が、現代の若者の精神構造であり、要するに、支離滅裂のめっちゃめっちゃの構造なのである。

ところが、そのような精神構造が、単に頭のいいだけの気のきいた青年によつてヘスキソ思考などと概念化されると、何か新しい思考法でも登場してきたかのように、人々は錯覚する。特に若者向けのジャーナリズムは、そういう精神分裂的な精神構造を積極的に肯定してみせただけのかさま哲学を、まるで何かひとかどの哲学でもあるかのように、センセーショナルにふれまわす。それどころか、もともと哲学に弱く、頭も弱い雑誌や週刊誌は、これを、哲学のニュー・ウエーブだの、ニュー・アカデミズムだのと言つておだてる。それは、単にあちこちの哲学のブランドを、ファッションとしてあれこれ等価的に身にまとい、同時にそれらを脱ぎ捨ててみせているだけにすぎないのに、それを、まるで天才でもあるかのように、ちやほやしたりするのである。

かつて、あのベレー帽をかぶつた強姦魔でさえ、車の中に『されどわれらが日々』などといった文学書を積み込んで、ちよいと洒落てみせていたものだが、無関連な構造をもつた人間は、いつもそういうふうには、色々こつちやのものを身につけて歩くものである。しかも、そういう洒落た芸術家風が、急にすべてをかなぐりすてて狂気じみた強姦魔に豹変するように、このインチキ哲学も、急にすべてをかなぐりすててへくそくらえ！と言わんばかりに、一個のニヒリズム風に変貌する。

だが、ピカートは、またこう言っている。

「彼らは、古いものにはもはや頓着しようと思ふ革命家のふりを装っているのである。しかし、この無関連なるもの世界では、はじめから万事が許容されている、……」

だから、一切を破壊するのは、ここでは元来自明のやり方なのである。しかも、人々はすでに破壊されているものまでも、もう一度破壊するのである。……そのような革命家

は、だから、ただ滑稽なだけである。……

それに、なによりも、……本当に「新しきもの」をもたらすところの真の詩人や哲学者ならば、その新しきものを無連関的に言い散らすような愚行を憚るにちがいない。人々を混乱せしめないためにも、彼はその新しきものを無連関のまままで示そうとはしないであろう」と。

ピカートも言っているように、このような連関性の喪失の世界では、ナチスにおいてそうであったように、モーツァルトの音楽と殺人までが同列に同居しさえする。ヒトラーが、右手で神に祈りながら、同時に左手で虐殺を平気で行うことができたのは、まさに分裂型精神構造によってであったのである。

分裂型精神構造のもとでは、無連関のバラバラのものが、バラバラのまままで平気で併存しうる。様々の断片的な情報が間断なく流されてくるテレビの構造は、ちょうどこの分裂型精神構造に合致している。そして、今日の「速走する世代」は、生まれたときからテレビが空気のよう存在し、この無連関の機械装置によって育てられた世代なのである。私は、かねがね、同じ高度成長期に育った世代でも、生まれたときからテレビのあった新人類世代と、そうでなかった団塊の世代とは、相当な感じ方の違いがあり、思想の受け取り方にも相当な差があるとみている。

一体に、一貫性を失っているということが、どうして美德になりうるのか。それは、単に、彼らの中で何もかもが散乱してしまっているということ、何ひとつ持続するものがないうということ、つまり、精神が連続性を失い、きれぎれに断片化してしまっているということとを表現しているにすぎないのに、彼らは、それをむしろ是として、得々と語る。彼らの散乱の構造は、諸情報が過度に飛びかう現代世界の持続なき散乱状況を、最も顕著なしかたで映し出しているにすぎない。ここでは、もはや節操などという言葉は死語と化し、人間は、ちょうどテレビのチャンネルを切り変えるように、容易に頭を切り変えることができる。可変的な人間、何でも代入しうる変数人間が登場してきたのである。それが、どうして近代の構造からの逃走でありうるであろうか。むしろ、それは、逆に「最近代」の構造にすぎないであろう。

相変わらずの舶来信仰

さらに、わが国においては、思想のブランドは、昔から大概西洋から輸入されてきており、そして西洋から輸入されてきたものは、何でも有難がられた。従って、その全くの延

長上に、あるいはその最顕落形態として、今日も、構造主義だのポスト構造主義だの、あるいはその他様々な哲学のブランドが輸入され、自らは考えるということがなく、それをアクセサリー化するということが起きる。しかも、移り気な日本人の習性として、ひとつことにとどまらずに、また次の新しいものへと絶えずなびいていく。かくて、あれこれおびただしい数の文献をたくさん引用し、しかも、それを徹底的に追及するということなく、それを笑い飛ばし、そこから逃げ出すということが生ずる。

そういう芸をみせたものが、天才でもあるかのようにもはやされたりするのは、ある意味で、昔からのわが国の風潮だったのでもある。

ここには、最も顕落した形ではあるが、相変わらずの舶来信仰がみられる。それは、パリでピエール・カルダンに指導を受けたということだけで、箔がつくファッション・デザイナーと変わるところがない。矛盾するものでも何でも、単なるアクセサリーにしてしまつて、しかも、その間に何の矛盾も感ずることなく同居させる構造も、ひとつには、そのような西洋から輸入だけすればよかつたわが国の近代の文化構造からもくると言えよう。今日のわが国の「逃走する世代」も、その点では、全く同じ構造の中にいると言わねばならない。

ピカートは、『神よりの逃走』の中で、次のように言っている。

「逃走の人間たちの多くはパスカル、キェルケゴール、ドストエフスキーの巨大なダイナミックな力を感じはするが、しかし彼等はこの内的な力を外的な力に転換するのだ。そして彼等は、まるで機関車にでもぶらさがるように、パスカル、キェルケゴール、ドストエフスキーにぶらさがり、この機関車によって引つ張られて行くのである。……現代人たちは逃走の世界のなかにあつて、この情熱によつて常に一つの場所から他の場所へと投げ飛ばしてもらうだけなのである。ドストエフスキー、パスカル、キェルケゴールは彼等の情熱に殉じた、……ところが現代人たちはその情熱でもつて策動するだけである」と。

文明のモラトリアムの中の悪ふざけ

それにもかかわらず、(逃走する世代)は逃走する。この巨大な近代の体制の中を、どこまでも逃走しようとする。だが、一体どこへ逃げようというのか。一体どこへ逃げおおせるといふのか。この近代の巨大な体制は、あまりにも巨大であるから、それは一種の運命であつて、逃げおおせるものではない。たとえ、逃げおおせたいと思ひ込むことができた

しても、行きついた果てが、また近代文明のまさに最先端にすぎなかったということにもなる。つまり、彼らへ逃走する世代は、巨大な文明のモラトリアムの中で、単にふざけているだけにすぎないということになる。彼らは、今日はこちらへ、明日はあちらへと、体制という濁流の中をあてもなく浮遊する根無し草のようなものにすぎない。むしろ、彼らは、この巨大なコンクリート文明に甘えているだけの単なる寄生虫にすぎないであろう。この文明の寄生虫達は、ただ、体制内で甘え半分に少しばかりすねてみるだけの、体制派と化してしまうであろう。

むしろ、近視眼的には、彼らは高度成長経済の落とし子にすぎず、この日本という四十年程も幸運にも続いたぬるま湯的な平和な体制の中の、単なる殺戮しにすぎない。何かの危機でも訪れば、つまり、この体制がちよつとでも甘えを許さなくなれば、雲散霧消するウンカのような存在にすぎない。

オルテガは、『大衆の反逆』の中で、そのような大衆の人間の心理が、生の欲望の無制限な拡大と、その生活の便宜を可能にしてくれたすべてのものになりたいするまったくの忘恩という二重の性格に支配されているとみている。そして、このような凡庸な大衆の支配する現代を、一言で「優心した坊ちゃん時代の捉え、

「優心した坊ちゃん」は、まったくの軽薄さから自分を捨て、すべてから逃げたのであるが、それはまさにあらゆる悲劇から逃れるためである」

と言う。そして、さらに次のように叙述している。

「ふまじめと冗談、これが大衆の人間の生の主調音である。かれらがなにかをするときには、ちよつとへん箱入り息子がいたずらをするのと同じように、自分の行ないは取り消しがきかないのだというまじめさが欠けている。……ふざけて人生を送っているのだ。

……

人間が精いっぱい、とことんまでがんばることのない、いかげんな態度で生きていくところには、かならず道化芝居がある。……かれは、宙ぶらりんの虚構の生をむなしく生きているのである。今日、重さも根もない生が、きわめて軽薄な風潮によって、いとも容易に押し流されているのは、そのためである。……

あまりに組織されすぎた世界に生まれ、そのなかで便宜だけを見だし、危険を感じないタイプの人間は、ふざけて暮らすよりほかに行動できないのである。環境によって甘やかされているのである。」

転身可能な人間

近代という時代は、いつも、世代が世代を蹴倒して逃走していくことを許してきた。若者には、義務は永遠に免除し、権利の主張は無制限に許してもきた。

しかし、このモラトリアム人間も、いつかは大人にならねばならない時がくる。そして、たえず大人になつてもきたのである。いつも、若者は、自らの小さな体験から己が存在証明を主張してきたが、また同時に、それはすっかり忘れて、あるいは忘れたかのように、気味悪いことだが、入社式で紺の背広に身をかためて、まるで軍隊のように整列したときから、会社人間になつたり、モーツ社員になつたり、穏健派になつたりしていった。かつて、大人を弾劾し罵倒した全共闘世代でさえ、時たてば、彼ら自身が、体制内に入り込んで、転身してきたのである。今日、大人世代をおちよくりこけにして嘲笑している世代も、いずれそのうち、近代文明が崩壊する前に、いちはやく転身していくであろう。そのように、いつも転身可能であり、切り変え可能な人間が、連関性を失つた近代の人間というものであった。ここでは、かえつてあの若い時代に主張したことは、あたかも空しい戯言（わら言）にすぎなかつたかのようにさえみえる。

いつの時代にも、特にひとつの文明の崩壊期には、連関性を失つた人間というものが登場してきた。古代ギリシアの崩壊期を生きたプラトンも、『国家』の中の民主制の批判のところ、民主制のもとの若者の生きざまを、おおむね次のように記述している。

「そして思うに、こうした若者は、必要な快楽にも、必要でない快楽にも、同じように金と骨折りと暇を費やしながら暮すのだ。つまり、あるときは酒に酔っぱらつて笛の音を愉しむかと思えば、ときには水ばかり飲んで身体を疲れさせ、ときには体操もやる。しかしまた、ときには怠けて、いつさいのことに気づかわず、ときには哲学に時をすごしているような様子も見せるというありさまで。だが、政治に加わることもしばしばあり、席を立て、思いつくままのことを言つたり、おこなつたりする。またときには、軍人たちを羨ましく思うと、そのほうへ行き、商人たちが羨ましくなると、こんどはそちらのほうへ向かう。そして、彼の暮らし方にはおおよそ秩序というものがなく、自分を強いるということもない。むしろ、そんな暮しを（快い、自由な、幸せな暮し）と呼んで、終生、そういう暮しをいとむのだ」と。

知は世代を越えるところから始まる

世代の小さな体験を越えるということ、そこから知というものは始まる。哲学は、流行

でもなく、世代でもない。もしも、哲学が単なる世代の代弁にすぎなくなつたとしたら、それは、哲学の、従つて知の頹落である。私が、『構造と力』も『逃走論』も、無視し去ることになっているのは、そのためである。しかし、それにもかかわらず、少しばかり頭がいいだけで、少しばかり軽妙だというだけで、まるで天才でもあるかのようにもてはやされるのが、この不易ならざるもののみが流行し、そして、すぐさま廃れていく、空しい現代の構造なのである。現代の退嬰的なブームは、それが何であろうと、ただ心あるもの沈黙によつてのみ許されているにすぎないであろう。

最後に一言つけ加えておきたい。帝政ローマ時代にも、世代から世代への頹落と逃走という意識はあつたようで、オルテガも『大衆の反逆』の中で引用しているが、ホラティウスは、次のような詩を遺している。

われらの祖父よりも劣つたわれらの父が

さらに劣等なわれわれを生んだ

われわれはもっと無能な子孫を生むことだろう

(五九・七・八)

何処へ？逃走する世代

ブームはおおかたまやかしてある

ブームというものは、大概、突如として起き、そしていつのまにか消え去ってしまう空しいものである。ブームは、どこからともなく湧き起こってきて、しかも、知らないうちに、跡形もなくなってしまう。それは、勢いの隆盛なときは、誰も抗することのできないほどの力をもっているかのようにもみえる。しかし、これは一種の共同幻想によってつくられているにすぎないのだから、やはり、これとても、ちやうど海潮が引くように、いずれは雲散霧消してしまう。人々は、ブームのときには、気が狂ったようにそれに飛びつき、誰もがそれを口にし、知らない者はまるで愚か者でもあるかのようにみえすが、時が過ぎれば、当の騒いだ人々も、狐憑きがとれたように、あっけらかんとしているものである。事実は何も変わっていないというのに、ブームの方が先に衰えてしまう。

ブームというものは、いつも、何かしら胡散臭いものをもっており、しかも、概してそれは偽ものである。現代においては、流行するものは何ら不易なものを宿さず、逆に、不易なものが流行するということは、今日ほとんどありえないからである。だから、私は、ブームになった本とか、記事とか、その他どんな情報も、本気では読みもせず、見もせず、おおむね無視することになっている。それが、ひとつの明確な批判の意思表示でもあると思うからである。

未熟を権利とする青年達

いつの時代でも、特に近代になってからというもの、大人に理解してもらえない若者の考えというものを、まるで若者にのみ許される特権的思考でもあるかのように主張することによって、若者を代弁する青年が登場してきて、それが一世を風靡し、ブームを巻き起こすことはあった。

第二次大戦後のわが国だけをとっても、〈太陽族〉という流行語を作ってデビューした作家がいたし、『されどわれらが日々』という若者の挫折を売りものにした作品でもはやされた作家もいた。その他、青春時代の革命運動での体験を商売道具にして、あろうことか、

商業ジャーナリズムに乗った評論家も登場してきた。近年の『限りなく透明に近いブルー』にしても、『なんとなくクリスタル』にしても、『構造と力』や『逃走論』にしても、『サラダ記念日』にしても、それぞれ主張内容は違うが、若者世代の意識の代弁という点では同類のものとみてよいであろう。彼らは、おのが世代の幼稚な経験に固執し、むしろ、この幼稚であることを売りものにしてきた。それどころか、現代では、殊にジャーナリズムの世界では、かえって、そういう未熟な青年達がおだてられ、甘やかされてもきたのである。

確かに、近代の精神構造は、大人には理解できなくなった青春時代の感覚を、若者達が権利として振りかざし、それにむしろ大人達が迎合し、媚び諂らうというところにあつたと言えるであろう。青年は、青年であるというだけで、まるで特権階級でもあるかのようには振舞い、それに引き寄せられるようにして、皆がこぞって「若い」ということに価値をおき、年寄も中年も、どうにかして若々しくあろうと無理をしようとする。それほど、若さというものが尊ばれ、老練ということが蔑まれるのである。かつて、若さは未熟を意味し、若者は、まだこれから指導され、大人の世界に入るべく訓練さるべき人間を意味し、逆に、老年は、経験と知恵を身につけた熟達者として尊ばれたのだが、現代では、この世代の重心が逆転する。

だが、若者達がそのように遊びほうけてじやれていられるのは、ただ単に、何不自由なく与えられた上に、社会的義務が底なしに免除されているためにすぎないのではないか。現に、オルテガは、『大衆の反逆』の中で、こう言っている。

「あらゆる義務から逃避するという事実は、現代の世界でいわゆる『青春』謳歌の基礎となつている、なかば滑稽で、なかば破廉恥な現象を、いくぶんか説明してくれる。……人々は、喜劇的に、自分が『青年』であると宣言する。なぜかという、かれらは、青年は、熟年に達するまで無期限に義務の履行を遅らせることができるのだから、義務よりも権利をよけいにもつことになる、ということ聞いたからである。……」

まるで嘘のように見えるかもしれないが、青春はゆすりになつてしまった。……暴力のゆすりと、冗談半分のゆすりである。そのどちらも同じことを望んでいるのだ。つまり、劣等な者、凡庸な人間が、いつさいの服従からの解放感を味わおうというのだ」と。

世代の分断と切那主義

近代という時代は、世代が世代を蹴落して限りなく逃走していく時代であつた。ここでは、各世代は、きれぎれに分断され、幾重もの層を作り、かくて、世代は世代をもちや理解す

ることができなくなり、互に反撥する。わが国でも、世代の分断はすでに久しく、例えば、明治世代と大正世代では、明らかに、考え方においても行動様式においても違いがある。大正世代と昭和世代も、戦争を境にして、戦中派と戦後派に分かれ、ここにももちろん大きなギャップがある。同じ昭和世代でも、旋跡閣市派・学童疎開派、さらに戦後っ子・戦無派に分かれ、同じ戦無派でも、団塊の世代と新人類では、意思疎通さえ不可能なくらいのもの感じ方の違いがある。へ世代論がもてはやされるのも、そのような、世代が次々と分断されていく近代の（逃走の構造）からくることである。

このような逃走の世界では、何かあるひとつの共通の経験を通して、人々が理解し合うということがないから、人々は、それぞれの世代の狭い体験に執着してバラバラになる。なかでも、逃走の推進者、つまり青年達は、以前の世代の価値観や世界観を粉々に破壊し、破壊することを自らの特権と自認して、すべてのもから逃走するから、彼らの精神もまた破壊され、中心を失い、散乱する。かくて、青年達の魂は一種の欠如態となり果てるから、そこでただ頼れるものは、切那切那の感覚だけだということにもなる。

フィリング人間というものが登場してきたのも、おそらくそのためであろう。というより、それは、その最類落形態だと言わなければならない。だからまた、このような切那的な感覚のみがわずかに価値判断の基準になるようなところへは、どんな無関連なものでも、同時に入り込んでくることができる。矛盾したものでも、正反対のものでも、この精神構造の中では、同列に同席しうるのである。ここには、マンガ本が入り込んでくるかと思うと、また時には、高尚そうな哲学本も入り込むことができ、しかも、それらはすべて相対的な価値しかもたない。

マックス・ピカートは、『われわれ自身のなかのヒトラー』の中で、こう言っている。

「若い人たちの頭のなかには、文学、歴史、外国語、数学、物理、化学等々と、まるで異質な教材がめつたやたらに積みあげられる。……そして学生は、あらゆる教材はただ一つの世界の各部分であることを学びとることができない。……つまり万事が無関連で支離滅裂なのだ。……このようにして学生は、自己自身をも——雑多な諸部分をなしている教材に中心点がないのと同様に——どこにも中心点をもたない連関性なき断片としてしか把握できなくなる……。」

支離滅裂の精神構造

このようなところでは、哲学もまた単なるアクセサリーにすぎなくなる。すでに彼らは

いかなる創造性をも失っているから、すでにあるところの哲学らしきものを、フリーコーダのデリダだの、構造主義だの記号論だのと出し並べて、それをチャラチャラと身につけることになる。少なくとも、身につけたつもりになる。しかも、それは単なるアクセサリーにすぎないから、そのうちのひとつを本気で究明するということもなく、ちょうど気に入らなくなったアクセサリーを放ってしまいうように、それらすべてを途中で投げ出してしまつて、逃走していく。まるで移り気な鳥のように、あるものからすぐにまた別のものへと飛び移っていく飽きっぽさ、それが、このへ逃走する世代の性格である。このようにして、関連なきものの同列化は起き、ひとつの階層的秩序が、青年達の魂の中で崩壊する。そのような構造が、現代の若者の精神構造であり、要するに、支離滅裂のめっちゃめっちゃの構造なのである。

ところが、そのような精神構造が、単に頭のいいだけの気のきいた青年によつてヘスキソ思考などと概念化されると、何か新しい思考法でも登場してきたかのように、人々は錯覚する。特に若者向けのジャーナリズムは、そういう精神分裂的な精神構造を積極的に肯定してみせただけのかさま哲学を、まるで何かひとかどの哲学でもあるかのように、センセーショナルにふれまわす。それどころか、もともと哲学に弱く、頭も弱い雑誌や週刊誌は、これを、哲学のニュー・ウエーブだの、ニュー・アカデミズムだのと言つておだてる。それは、単にあちこちの哲学のブランドを、ファッションとしてあれこれ等価的に身にまとい、同時にそれらを脱ぎ捨ててみせているだけにすぎないのに、それを、まるで天才でもあるかのように、ちやほやしたりするのである。

かつて、あのベレー帽をかぶった強姦魔でさえ、車の中に『されどわれらが日々』などといった文学書を積み込んで、ちよいと洒落てみせていたものだが、無関連な構造をもつた人間は、いつもそういうふうには、色々こつちやのものを身につけて歩くものである。しかも、そういう洒落た芸術家風が、急にすべてをかなぐりすてて狂気じみた強姦魔に豹変するように、このインチキ哲学も、急にすべてをかなぐりすててへくそくらえ！と言わんばかりに、一個のニヒリズム風に変貌する。

だが、ピカートは、またこう言っている。

「彼らは、古いものにはもはや頓着しようと思ふ革命家のふりを装っているのである。しかし、この無関連なるもの世界では、はじめから万事が許容されている、……

だから、一切を破壊するのは、ここでは元来自明のやり方なのである。しかも、人々はすでに破壊されているものまでも、もう一度破壊するのである。……そのような革命家

は、だから、ただ滑稽なだけである。……

それに、なによりも、……本当に「新しきもの」をもたらすところの真の詩人や哲学者ならば、その新しきものを無連関的に言い散らすような愚行を憚るにちがいない。人々を混乱せしめないためにも、彼はその新しきものを無連関のまままで示そうとはしないであろう」と。

ピカートも言っているように、このような連関性の喪失の世界では、ナチスにおいてそうであったように、モーツァルトの音楽と殺人までが同列に同居しさえする。ヒトラーが、右手で神に祈りながら、同時に左手で虐殺を平気で行うことができたのは、まさに分裂型精神構造によってであったのである。

分裂型精神構造のもとでは、無連関のバラバラのものが、バラバラのまままで平気で併存しうる。様々の断片的な情報が間断なく流されてくるテレビの構造は、ちょうどこの分裂型精神構造に合致している。そして、今日の「速走する世代」は、生まれたときからテレビが空気のよう存在し、この無連関の機械装置によって育てられた世代なのである。私は、かねがね、同じ高度成長期に育った世代でも、生まれたときからテレビのあった新人類世代と、そうでなかった団塊の世代とは、相当な感じ方の違いがあり、思想の受け取り方にも相当な差があるとみている。

一体に、一貫性を失っているということが、どうして美德になりうるのか。それは、単に、彼らの中で何もかもが散乱してしまっているということ、何ひとつ持続するものがないうということ、つまり、精神が連続性を失い、きれぎれに断片化してしまっているということとを表現しているにすぎないのに、彼らは、それをむしろ是として、得々と語る。彼らの散乱の構造は、諸情報が過度に飛びかう現代世界の持続なき散乱状況を、最も顕著なしかたで映し出しているにすぎない。ここでは、もはや節操などという言葉は死語と化し、人間は、ちょうどテレビのチャンネルを切り変えるように、容易に頭を切り変えることができる。可変的な人間、何でも代入しうる変数人間が登場してきたのである。それが、どうして近代の構造からの逃走でありうるであろうか。むしろ、それは、逆に「最近代」の構造にすぎないであろう。

相変わらずの舶来信仰

さらに、わが国においては、思想のブランドは、昔から大概西洋から輸入されてきており、そして西洋から輸入されてきたものは、何でも有難がられた。従って、その全くの延

長上に、あるいはその最顕落形態として、今日も、構造主義だのポスト構造主義だの、あるいはその他様々な哲学のブランドが輸入され、自らは考えるということがなく、それをアクセサリー化するということが起きる。しかも、移り気な日本人の習性として、ひとつことにとどまらずに、また次の新しいものへと絶えずなびいていく。かくて、あれこれおびただしい数の文献をたくさん引用し、しかも、それを徹底的に追及するということがもなく、それを笑い飛ばし、そこから逃げ出すということが生ずる。

そういう芸をみせたものが、天才でもあるかのようにもはやされたりするのは、ある意味で、昔からのわが国の風潮だったのでもある。

ここには、最も顕落した形ではあるが、相変わらずの舶来信仰がみられる。それは、パリでピエール・カルダンに指導を受けたということだけで、箔がつくファッション・デザイナーと変わるところがない。矛盾するものでも何でも、単なるアクセサリーにしてしまつて、しかも、その間に何の矛盾も感ずることなく同居させる構造も、ひとつには、そのような西洋から輸入だけすればよかつたわが国の近代の文化構造からもくると言えよう。今日のわが国の「逃走する世代」も、その点では、全く同じ構造の中にいると言わねばならない。

ピカートは、『神よりの逃走』の中で、次のように言っている。

「逃走の人間たちの多くはパスカル、キェルケゴール、ドストエフスキーの巨大なダイナミックな力を感じはするが、しかし彼等はこの内的な力を外的な力に転換するのだ。そして彼等は、まるで機関車にでもぶらさがるように、パスカル、キェルケゴール、ドストエフスキーにぶらさがり、この機関車によって引つ張られて行くのである。……現代人たちは逃走の世界のなかにあつて、この情熱によって常に一つの場所から他の場所へと投げ飛ばしてもらうだけなのである。ドストエフスキー、パスカル、キェルケゴールは彼等の情熱に殉じた、……ところが現代人たちはその情熱でもつて策動するだけである」と。

文明のモラトリアムの中の悪ふざけ

それにもかかわらず、(逃走する世代)は逃走する。この巨大な近代の体制の中を、どこまでも逃走しようとする。だが、一体どこへ逃げようというのか。一体どこへ逃げおおせるといふのか。この近代の巨大な体制は、あまりにも巨大であるから、それは一種の運命であつて、逃げおおせるものではない。たとえ、逃げおおせたいと思ひ込むことができた

しても、行きついた果てが、また近代文明のまさに最先端にすぎなかったということにもなる。つまり、彼らへ逃走する世代は、巨大な文明のモラトリアムの中で、単にふざけているだけにすぎないということになる。彼らは、今日はこちらへ、明日はあちらへと、体制という濁流の中をあてもなく浮遊する根無し草のようなものにすぎない。むしろ、彼らは、この巨大なコンクリート文明に甘えているだけの単なる寄生虫にすぎないであろう。この文明の寄生虫達は、ただ、体制内で甘え半分に少しばかりすねてみるだけの、体制派と化してしまうであろう。

むしろ、近視眼的には、彼らは高度成長経済の落とし子にすぎず、この日本という四十年程も幸運にも続いたぬるま湯的な平和な体制の中の、単なる殺戮しにすぎない。何かの危機でも訪れば、つまり、この体制がちよつとでも甘えを許さなくなれば、雲散霧消するウンカのような存在にすぎない。

オルテガは、『大衆の反逆』の中で、そのような大衆の人間の心理が、生の欲望の無制限な拡大と、その生活の便宜を可能にしてくれたすべてのものになりたいするまったくの忘恩という二重の性格に支配されているとみている。そして、このような凡庸な大衆の支配する現代を、一言で「優心した坊ちゃん時代の捉え、

「優心した坊ちゃん」は、まったくの軽薄さから自分を捨て、すべてから逃げたのであるが、それはまさにあらゆる悲劇から逃れるためである」

と言う。そして、さらに次のように叙述している。

「ふまじめと冗談、これが大衆の人間の生の主調音である。かれらがなにかをするときには、ちよつとへん箱入り息子がいたずらをするのと同じように、自分の行ないは取り消しがきかないのだというまじめさが欠けている。……ふざけて人生を送っているのだ。

……

人間が精いっぱい、とことんまでがんばることのない、いかげんな態度で生きていくところには、かならず道化芝居がある。……かれは、宙ぶらりんの虚構の生をむなしく生きているのである。今日、重さも根もない生が、きわめて軽薄な風潮によって、いとも容易に押し流されているのは、そのためである。……

あまりに組織されすぎた世界に生まれ、そのなかで便宜だけを見だし、危険を感じないタイプの人間は、ふざけて暮らすよりほかに行動できないのである。環境によって甘やかされているのである。」

転身可能な人間

近代という時代は、いつも、世代が世代を蹴倒して逃走していくことを許してきた。若者には、義務は永遠に免除し、権利の主張は無制限に許してもきた。

しかし、このモラトリアム人間も、いつかは大人にならねばならない時がくる。そして、たえず大人になつてもきたのである。いつも、若者は、自らの小さな体験から己が存在証明を主張してきたが、また同時に、それはすっかり忘れて、あるいは忘れたかのように、気味悪いことだが、入社式で紺の背広に身をかためて、まるで軍隊のように整列したときから、会社人間になつたり、モーツ社員になつたり、穏健派になつたりしていった。かつて、大人を弾劾し罵倒した全共闘世代でさえ、時たてば、彼ら自身が、体制内に入り込んで、転身してきたのである。今日、大人世代をおちよくりこけにして嘲笑している世代も、いずれそのうち、近代文明が崩壊する前に、いちはやく転身していくであろう。そのように、いつも転身可能であり、切り変え可能な人間が、連関性を失つた近代の人間というものであった。ここでは、かえつてあの若い時代に主張したことは、あたかも空しい戯言たわ言にすぎなかつたかのようにさえみえる。

いつの時代にも、特にひとつの文明の崩壊期には、連関性を失つた人間というものが登場してきた。古代ギリシアの崩壊期を生きたプラトンも、『国家』の中の民主制の批判のところ、民主制のもとの若者の生きざまを、おおむね次のように記述している。

「そして思うに、こうした若者は、必要な快楽にも、必要でない快楽にも、同じように金と骨折りと暇を費やしながら暮すのだ。つまり、あるときは酒に酔っぱらつて笛の音を愉しむかと思えば、ときには水ばかり飲んで身体を疲れさせ、ときには体操もやる。しかしまた、ときには怠けて、いっさいのことに気づかわず、ときには哲学に時をすごしているような様子も見せるというありさまで。だが、政治に加わることもしばしばあり、席を立て、思いつくままのことを言つたり、おこなつたりする。またときには、軍人たちを羨ましく思うと、そのほうへ行き、商人たちが羨ましくなると、こんどはそちらのほうへ向かう。そして、彼の暮らし方にはおおよそ秩序というものがなく、自分を強いるということもない。むしろ、そんな暮しを（快い、自由な、幸せな暮し）と呼んで、終生、そういう暮しをいとむのだ」と。

知は世代を越えるところから始まる

世代の小さな体験を越えるということ、そこから知というものは始まる。哲学は、流行

でもなく、世代でもない。もしも、哲学が単なる世代の代弁にすぎなくなつたとしたら、それは、哲学の、従つて知の頹落である。私が、『構造と力』も『逃走論』も、無視し去ることになっているのは、そのためである。しかし、それにもかかわらず、少しばかり頭がいいだけで、少しばかり軽妙だというだけで、まるで天才でもあるかのようにもてはやされるのが、この不易ならざるもののみが流行し、そして、すぐさま廃れていく、空しい現代の構造なのである。現代の退嬰的なブームは、それが何であろうと、ただ心あるもの沈黙によつてのみ許されているにすぎないであろう。

最後に一言つけ加えておきたい。帝政ローマ時代にも、世代から世代への頹落と逃走という意識はあつたようで、オルテガも『大衆の反逆』の中で引用しているが、ホラティウスは、次のような詩を遺している。

われらの祖父よりも劣つたわれらの父が

さらに劣等なわれわれを生んだ

われわれはもっと無能な子孫を生むことだろう

(五九・七・八)